オカルト的タロットの黎明（1）
――クール・ド・ジェブラン「タロット・ゲームについて」

伊　藤　博　明

はじめに

現在ではもっぱら占い用のカードとして人気を博しているタロット・カードであるが、元来は、貴族の間の遊戯的なカードとして、15 世紀後半の北イタリアの宮廷社会において成立したものである[1]。そののち、タロット・カードはさまざまな形態をとりながら、アルプスを越えて、フランス、ドイツ、スイス地方において受容されていった。

このカードが古代エジプトで起源であると説かれ、それにオカルト的（秘教的）意味が付与され、さらに予言の術と見なされる発端となったのは、1781 年にアントワーヌ・クール・ド・ジェブラン（Antoine Court de Gébelin）がパリで刊行した『原初世界――分析され、現代世界と比較された』（*Monde Primitif, Analysé et Comparé avec le Monde Moderne*）第８巻に収められた二つの論考による。すなわち、クール・ド・ジェブランの「タロット・ゲームについて――その起源について論じられ、その寓意について解明され、われわれの現代のゲーム用タロットの起源が明らかにされる」（Du Jeu des Tarots,

[1] タロットの歴史については膨大な研究が蓄積されているが、ここでは「古典」というべき次の二点を挙げておきたい。Stuart R. Kaplan, *The Encyclopedia of Tarot*, vol.1-2, New York: U.S. Games Systems, 1978-86; Michael Dummett, *The Game of Tarot: From Ferrara to Salt Lake City*, with the Assistance of Sylvia Mann, London: Duckworth, 1980. 邦語文献としては以下がある。鏡リュウジ『タロット――こころの図像学』、河出書房新社、2002 年。同『タロットの秘密』、講談社現代新書、2017 年。伊泉龍一『タロット大全――歴史から図像まで』、紀伊國屋書店、2004 年。伊藤博明「ルネサンスにおけるタロットの創出――「マンテーニャのタロット」をめぐって」、『ユリイカ』、第 53 巻第 14 号（2021 年 11 月）、13-36 ページ。

Où l'on traite de son origine, où on explique ses Allégories, & où l'on fait voir qu'il est la source de nos Cartes modernes à jouer, &c, &c.）と M. le C. de M. ***（実際はド・メレ）の論考「タロットについて、およびタロット・ゲームによる予言についての探究」（Recherches sur les Tarots, et sur la divination par les cartes des Tarot）である。

本稿では前者に関して、クール・ド・ジェブランの生涯、ド・ジェブランのタロット・カードの理解についての特徴、その背景となったエジプトマニアについて紹介するとともに、ド・ジェブランの「タロット・ゲームについて」の翻訳（第１項～第２項および「結論」）を試みたい。もう一つの論考であるド・メレの「タロットについての探究」については本論集の次号で考察する予定である。

１　クール・ド・ジェブランの生涯

アントワーヌ・クール・ド・ジェブランは、フランスのプロテスタントとして著名であったアントワーヌ・クール（Antoine Court, 1695-1760）とエティエネット・パージェ（Étiennette Pagès）の三男として、おそらく父が迫害を逃れて亡命していたスイスで生まれた[2]。生年については、資料によって、1719 年、1724 年、1725 年、1728 年とさまざまに解釈される余地があるが、ド・ジェブラン自身があえて曖昧にしていた可能性がある。

ド・ジェブランはスイスで学んだのち、1754 年にプロテスタントの牧師となった。母はその翌年に亡くなり、父もその５年後に亡くなった。1762 年にフランスに赴き、南フランスと西フランスの多くのプロテスト教団を訪ねて、1763 年にパリに落ち着く。彼は生涯をパリで過ごし、結婚することはなく、またスイスの市民権も保持し続けていた。彼はパリで、プロテスタント派として活躍するだけでなく、フリーメイソンとイリュミニストの運動に参加していく。

[2] クール・ド・ジェブランの伝記的事実については、主に以下に負っている。Ronald Decker, Thierry Depaulis, and Michael Dummett, *A Wicked Pack of Cards*, New York: St. Martin's Press, 1996, pp.52-64. 伊泉、前掲書、91-109 ページも参照。

ド・ジェブランは最初、プロテスタント教会の公式な代表者となる希望をもっていたが、それは生涯かなうことはなかった。しかし、彼は生涯を通じてプロテスタントの擁護者として活動し続けただけではなく、また宮廷や高官とも良好な関係を築こうとしていた。生涯の終わり近く、1778 年ごろに彼は王立検閲官の地位についたが、それはプロテスタントのスイス市民にとって異例のことだった。

さて、1770 年代にド・ジェブランはフリーメイソンのオカルト的な運動にのめりこんでいく。彼は 1771 年に設立された「レ・ザミ・レウニ」（Les Amis Réunis）のメンバーとなり、続いて有名な「レ・フヌ・スール」（Les Neuf Soeurs）に入会して、1778 年はその秘書となる。このロッジには、ヴォルテールやベンジャミン・フランクリンも属していた。1777 年には、スコットランドのフリーメイソンのロッジで、メイソンの諸段階についての寓意的な意味について講演している。

1775 年に「レ・ザミ・レウニ」からは、サルヴァレット・ド・ランジュのもとで、新しいロッジの「フィラレート」（Philalète）が誕生し、ド・ジェブランもその設立メンバーの一人となる。このフィラレートは、ほとんどあらゆるタイプのイリュミニスムとオカルティズムの坩堝であった。1780 年には自ら「ソシエテ・アポロニエンヌ」（Société Apollonienne）を興して、その代表者となる。このロッジは「ムゼ・ド・パリ」（Musée de Paris）に発展するが、それは主として講読、講演、議論の場であった。ド・ルブランは「レザミ・レウニ」のメンバーであり続けており、1783 年には 12 番目の最高の段階に属する 7 人の一人に選ばれている。

さて、クール・ド・ジェブランは 1772 年に、多数の巻から成る『原初世界』の刊行を目論んで、予約購読を促すための趣意書を発表した。４千冊ほどの予約注文が集まり、国王も 100 冊を予約した。9 巻から成る大著は 1773 年から 1782 年にかけて出版されたが、完成にいたることなく、著者の 1784 年の死によって終了した。ド・ジェブランの後年の主たる関心事は『原初世界』の刊行であり、それによって彼はある種の名声を得ることができた。

ド・ジェブランがタイトルに選んだ「原初世界」とは、彼にとっては、未開の、あるいは野蛮な古代社会を意味するのではなく、むしろ一種の「黄金

時代」を、原初の文明を指しており、そののちの歴史は、この時代から堕落していく過程と見なされた。彼によれば、「原初世界」においては、人類は一つの言語、一つの慣習、一つの文化、一つの宗教を共有していた。「そこには永遠で不動の秩序が存在しており、それが天と地を、身体と魂を、自然的な生と道徳的な生を、人々を、社会を、国々を……結びつけていた」[3]。

このような原始の時代に理想的な社会を想定することは、ジャン＝ジャック・ルソーの「自然状態」という理念ともある種の共通性をもっていた。実際に、同時代の 1785 年にはル・グロス神父が両者の思想の比較を試みている[4]。ド・ジェブランはさらに、幾つかの方策を用いて、失われた文明を再構築できると考えていた。その一つが神話の寓意的解釈である。たとえば、ヘラクレスの十二功業は、十二ヶ月に行われる農作業の各々を表すとされる。

神話のこのような解釈は、ルネサンス期のイタリアに復活したものであり、たとえば、フィレンツェの人文主義者コルッチョ・サルターティ（1331-1406）は『ヘラクレスの功業について』（*De laboribus Herclis*）と題する作品（全４巻）を残している[5]。その第２巻からヘラクレスをめぐる伝説の分析が始まり、第３巻において、ヘラクレスのさまざまな功業に関する詳細な議論が展開されている。ド・ジェブランがサルターティの著作について知っていたとは考えられないが、彼もヨーロッパの人文主義的伝統と結びついていたと見なすこともできるだろう。ド・ジェブランよりも少し前に活躍したナポリの哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコ（1668-1744）も、古代の詩的神話について哲学的分析を加えていた。

ド・ジェブランの別の方策は、言語の起源についての探究である。彼はこれによって、16 の原初的アルファベットから構成される、単一の言語を想定することができると考えた。もちろん、彼の言語学的な着想の結果は、インド・ヨーロッパ語族の存在を推定した、のちの言語学者たちの成果とはまったく異なる。ド・ジェブランの推論はまったく非学問的であり、その結論は

---

[3] Court de Gébelin, *Le Monde primitif*, vol. 8, 1781, p. xix. Cf. Decker et al., *op.cit.*, p.56.

[4] Abbé Le Gros, *Analyse des ouvrages J.-J. Rousseau, de Genève, et de M. Court de Géblin, auteur du Monde primitif*, Paris, 1785.

[5] 以下を参照。伊藤博明『ルネサンスの神秘思想』、講談社学術文庫、2012 年、49-54 ページ。

たんなる思いつきと言うべきものである。彼によれば、「ヒエログリフ的な文字の A と M と N」（les caractères hiéroglyphiques, A, M & N）は、「父、母、子、すなわち新しく生まれた者」を表すとされているが、これが「AMEN」という言葉を意味するのかどうかは明瞭でない[6]。

『原初世界』の第 1 巻で示された全体のプランの中には、「タロット」への言及はないが、1778 年刊行の第 5 巻に含まれている「フランス語の語源辞典」の中に、フランス語の「タロ」（Taraux）の項目が存在し、次のように説明されている。

> ドイツ、イタリア、スイスでよく知られているカード・ゲーム（jeu de cartes）。それは、われわれがいつの日にか証明するように、エジプトのゲームである。その名称は二つの東洋の語、すなわち、TAR と Rha, Rho から構成されており、「王の道」（chemin royal）を意味している[7]。

ド・ジェブランがタロット・カードについて知った、あるいは興味をもったのは、その数年前と考えるべきだろう。「タロット・ゲームについて」（1781 年）では、その出会いが「ドイツかスイスから到着した C. d'H 夫人」が行っていたゲームに起因することが述べられている。この女性はエルヴェティウス夫人（Madame de C. d'Helvétius, 1719-1800）と、現在では同定されているが、その場でド・ジェブランは、このカードがエジプト起源であることに、しかもそこにはエジプト人の諸観念が込められていることに即座に気づいたのであった。

ド・ジェブランは晩年、オーストリアの医師、フランツ・フリードリヒ・アントン・メスメル（1734-1815）が唱えた「動物磁気説」に惹かれ、その熱心な信奉者となった。メスメルはパリに 1778 年に来たが、ド・ジェブランはすぐに彼の「普遍的協和協会」に加わった。1783 年 3 月、ド・ジェブランは両脚に強い痛みを感じるようになった。彼はそれから「動物磁気説」に基づ

---

[6] Court de Gébelin, *Le Monde primitif*, vol.3, 1775, p.410. Cf. Cf. Decker et al., *op.cit.*, pp.56-57.
[7] Court de Gébelin, *Le Monde primitif*, vol.5, 1778, cols. 1118-1119. Cf. Decker et al., *op.cit.*, p. 57.

く治療を受けていたが、1784 年５月 21 日、磁気桶に浸かったまま最期を遂げた。オックスフォード大学ボードリー図書館所蔵の『原初世界』の一冊の表紙裏には、次のようなエピタフがフランス語で記されている。

ここに哀れなジェブランが眠る。
ギリシア語、ヘブライ語、ラテン語を話した者。
皆は、彼の英雄主義を讃えよ。
彼は磁気説の殉教者だった[8]。

２　ド・ジェブランのタロット・カードの解釈

ド・ジェブランのタロット・カードの解釈の基盤は、彼がこのカードの起源をエジプトと信じていたことである。彼にとってエジプトは、上述した「原初世界」にもっとも近い国であった。そして、エジプトの賢者によって創案されたタロット・カードは、人々の無知の中で遊戯用のゲームとして生き延びてきて、ようやく一九世紀後半のパリで彼（とド・メレ）によって、その真の寓意的な教説と予言の術への応用方法が明らかにされた。したがって、タロット・カードの各々についても、従来とは異なる「エジプト的」な解釈がしばしば加えられている。図 1 は、22 枚の「切り札」（Atours）――一般的には「大アルカナ」と呼ばれているカード――について、18 世紀に流布していたマルセイユ版のデッキと 20 世紀初頭から一般的になったウェイト＝スミス版のデッキをド・ジェブランの説明と比較した一覧表である。

その中で、とりわけ、他のデッキにおける名称とド・ジェブランの名称が異なっているカードについて取り上げたい。

まず、マルセイユ版以前は「教皇」と「女教皇」と見られていたカード（第２番と第５番）を、ド・ジェブランは「大祭司」と「女大祭司」とし、両者が結婚していると述べている。女大祭司が仕えるのはエジプトのイシス神であり、それゆえ彼女は女神がもつ、二重の角のある二重の冠をかぶっている。

[8] Cited by Decker et al., *op.cit.*, p.64.

	クール・ド・ジェブラン	マルセイユ版	ウェスト＝スミス版
0	愚者（Le Fou）	狂人（Le Mat）	愚者（The Fool）
I	奇術師（Le Bateleur）	奇術師（Le Bateleur）	奇術師（The Magician）
II	女大祭司（La Grande Pretresse）	女教皇（La Papesse）	女祭司（The High Priestess）
III	女王（La Reine）	女帝（L'Imperatrice）	女帝（The Empress）
IV	王（Le Roi）	皇帝（L'Empereur）	皇帝（The Emperor）
V	大祭司（Le Grande Pretre）	教皇（Le Pape）	教皇（The Hierophant）
VI	結婚（Le Mariage）	恋人（L'Amoureux）	恋人（The Lovers）
VII	勝ち誇るオシリス（Osiris Triomphant）	戦車（Le Chariot）	戦車（The Chariot）
VIII	正義（Le Justice）	正義（Le Justice）	正義（Justice）
IX	賢者（Le Sage）	隠者（L'Hermite）	隠者（The Hermit）
X	運命の輪（La Roue de Fortune）	運命の輪（La Roue de Fortune）	運命の輪（Wheel of Fortune）
XI	力（La Force）	力（La Force）	力（Strength）
XII	賢慮（La Prudence）	吊された男（Le Pendu）	吊された男（The Hanged Man）
XIII	死（La Mort）	［死（名称なし）］	死（Death）
XIV	節制（La Temperance）	節制（La Temperance）	節制（Temperance）
XV	テュポン（Typhon）	悪魔（Le Diable）	悪魔（The Devil）
XVI	神の家（Maison-Dieu）	神の家（La Maison Dieu）	塔（The Tower）
XVII	犬の星（La Canicule）	星（Le Toille）	星（The Star）
XVIII	月（La Lune）	月（La Lune）	月（The Moon）
XIX	太陽（Le Soleil）	太陽（Le Soleil）	太陽（The Sun）
XX	創造（Création）	審判（Le Jugement）	審判（Judgement）
XXI	時（Le Tems）	世界（Le Monde）	世界（The World）

図１　クール・ド・ジェブラン「タロット・ゲームについて」、マルセイユ版、ウェイト＝スミス版対照表

一方、大祭司がもつ三重十字架の錫については、それは「まったくエジプトのモニュメント」であると、またそれが古代エジプトの「イシス板」に見られると述べている。

次に従来は「戦車」とされていたカードは、エジプトの「勝ち誇るオシリス」であるとされる。ド・ジェブランによれば、オシリスは「エジプト人の偉大な神」であり、またシバの人々にとっても同様であった。このカードでオシリスは、手に錫をもち、戴冠した、王の姿のもとに現れる。

ド・ジェブランは、タロットがエジプト起源であると述べながら、第８番・第 11 番・第 12 番・第 14 番を、「４つの枢要徳」と呼んでいる。正義・力（剛毅）・賢慮（賢明）・節制は、元来はプラトンの『国家』第４巻で挙げられている徳であるが、のちキリスト教に取り入れられて、「枢要徳」（virutus cardinales）と呼ばれ、信仰・希望・慈愛の「対神徳」とともに７つの徳を形成していた。

ド・ジェブランの説明でもっとも驚くべきは、これらの中の「賢慮」についてのものであろう。このカードには、従来は木から一本足で逆さに吊り下げられた男が描かれる。たしかに謎めいたカードであるが、彼はそれの上下を転倒させ、片足で立っている姿として、「賢慮」を表すものと考える。彼が吊り下げられたのは、「邪悪でうぬぼれたカード製作者の仕業であり、彼はこの絵画の下に潜んでいる寓意の美を理解することなく、自分自身で勝手に直して、そのことによってカードをまったく損なってしまった」。

また、第 15 番の「テュポン」は、カードのエジプト化の最たるものであろう。キリスト教的な「悪魔」は、エジプトのオシリスとイシスの弟で、「悪の根源、冥界の最大の悪魔」であるテュポンと解釈される。第 16 番の「神の家、あるいはプルトスの城」では、ヘロドトスの『歴史』の記述に従いながら、ランプシニトス王の物語が、その起源譚として詳しく語られている。

第 18 番「月」と第 17 番（一般的には）「星」についてのド・ジェブランの解釈も興味深い。まず月については、パウサニアス『ギリシア案内記』の記述をもとに、エジプト人によれば、イシスの「涙」と呼ばれる雨がナイル河を氾濫させるが、エジプト人はこれを月から落ちる「滴」、すなわち涙と呼んでいる。また、カードに見られる「ヘラクレスの二本の柱」の間に二匹の犬がいるが、これは完璧にエジプト的な観念であり、二つの回帰線を意味している。それについて彼は、ギリシア教父のアレクサンドリアのクレメンスの『ストロマテイス』の一節を参照している。

また「星」についてド・ジェブランは、「犬の星」、すなわちシリウスと呼んでいる。というのも、シリウスが昇る時期に、ナイル河の氾濫が起こるからであり、それゆえに「犬の星」はイシスに捧げられているのである。

最後の二つのカード、通例は「審判」という名称の第20番と、「世界」という名称の第21番は、ド・ジェブランによれば、ともに「誤って名づけられた」ものである。前者については、トランペットを鳴らしている天使を表しているのだが、地上に見える老人、女性、裸の子どもから、意味を取り違えたカード製作者が、そこに「最後の審判」を見いだした。しかし、実は、時の始まりに生じた「創造」を示している。また、第21番の方は、万物の始原としての「世界」はなく、むしろ「時」を表している。

「スート」（Les Couleurs）の４種類（剣、コップ、棒、コイン）は、すべてエジプト人が区別した４つの境遇（支配者と貴族、聖職者と祭司、農民、商人）に関係している。

さらに、タロット・カードは７という数字に基づいている。すなわち、各々のスートは７×２（＝14）、切り札は７×３（＝21）の数から成り、カードの枚数は77枚である（「愚者」は０である）。この７という数はエジプト人があらゆる学知の原理としているものである。

ド・ジェブランは最後に「タロット」、フラン語では「タロ」（Tarot）という名称が純粋にエジプト的であると述べている。「道」、「道路」を意味する「タル」（Tar）と、「王」、「王の」を意味する「ロ」（Ro）、「ロス」（Ros）、「ロス」（Roc）から構成されおり、文字通りには「人生の王の道」を意味するのである。また、このゲームの予言の適用についても、それがエジプト起源であることが示唆されている。

３　ド・ジェブランとエジプトマニア

ド・ジェブランがタロット・カードの起源をエジプトに求めたことは、当時のパリ、ひいては全ヨーロッパ規模のエジプトマニアと無関係ではないだろう。この文化的・宗教的情況を扱った最良の書物は、現在においても、ユルギス・バルトルシャイテスの『イシス探求――ある神話の伝承をめぐる試

論』（初版 1967 年、改訂増補版 1985 年）である[9]。

その第１章「フランス革命期におけるエジプトの神統系譜説」は、クール・ド・ジェブランの『原初世界』第１巻（1773 年）における、初期のパリ住民の信仰とエジプト神話の関係の引用から始まっている。

> パリがはじめ「島」に局限されていたのは、万人周知の事実である。つまり、パリはその起源からして航海都市であった。……パリは河中にあって航海に意を用いていたため、船を市のシンボルとし、航海の女神イシスを守護女神とした。この船こそは、イシスの船、すなわちこの女神のシンボルであった。……かくてまた、この船の名が町の名前となった。船がバリス（Baris）と呼ばれ、これがガリア北部の強い発音のせいでパリ（Paris）となったのだ[10]。

ド・ジェブランによれば、パリを創設する場所の選定そのものが、エジプトの宗教と直接的に関連しており、ドルイド僧団がこの島に居を構えたのもイシスを考慮してのことである。その昔は民族の神を祀る祭壇には島が選ばれたが、パリの島にはイシス神殿があり、ノートル・ダム教会はその廃墟の上に建てられたのである。そこで１月３日に行われる祭りはかつて「イシス到来祭」と呼ばれていた。

この途方もない想像力がド・ジェブラン一人のものでないことは、ニコラ・ド・ボヌヴィル（1760-1824）が 1791 年に刊行した『諸宗教の精神について』（*De l’esprit des religions*）を繙けば明瞭である。彼は排他的な諸宗教の上に再建されるべき世界宗教を構想するが、その礎に置かれるべき神がイシスなのである。古代人は自然をイシス、あるいは「エスーエス」と、あるいは「イスーイス」と呼んでいた。ケルト人とエジプト人の間では、イシスの秘儀はわれわれのイエスの玄義と異なるところがない。「イシスとイエズスという語は、もともと本質的に同じものの別名であった」[11]。

---

[9] 有田忠郎訳、国書刊行会、1992 年。
[10] 同上訳、33-34 ページ。
[11] 同上訳、35-39 ページを参照。

エジプトマニアの極北と言うべき議論であるが、この趣向もまたルネサンス期のイタリアに遡る[12]。その発端は、1419 年にイタリア人クリストフォロ・ブオンデルモンティがアンドロス島でギリシア語によって書かれた写本を発見し、1422 年にフィレンツェに送付したことに求められる。それはホラポッロ、あるいはホラポロンというエジプト人が書き記した『ヒエログリフィカ』（*Hieroglyphica*）という、エジプトの象徴的文字を蒐集し、それに解説を施した書物である[13]。人文主義者たちはこの発見に熱狂したが、それは彼らがヘロドトス、プルタルコス、プリニウスなど古代の著作家をとおして、エジプトのヒエログリフのことを知っており、それが自然界と人間界の真理を明らかにする秘儀的言語だと考えていたからである[14]。

次に重要な出来事は、1460 年代初頭にフィレンツェのコジモ・デ・メディチの許に、伝説のエジプトの智者ヘルメス・トリスメギストスに帰されたギリシア語の作品『ヘルメス選集』（*Corpus hermeticum*）がもたらされたことである。プラトン主義的哲学者のマルシリオ・フィチーノ（1433-1499）がすぐにラテン語訳にとりかかり、1471 年に『ピマンデル』というタイトルで刊行された。思想的にはヘレニズム時代に特有のシンクレティズムが横溢している作品であるが、フィチーノはそれが「神学の最初の創始者」である、エジプトのヘルメスが書いたことに疑いを抱くことなく、彼にゾロアスター、オルペウス、ピュタゴラスが続き、そしてプラトンによって「古代神学」が完

---

[12] ルネサンスのエジプトマニアについては以下を参照。Erik Iversen, *The Myth of Egypt and Its Hieroglyphs in European Tradition*, Copenhagen: GAD, 1961; Brian Curran, *The Egyptian Renaissance. The Afterlife of Ancient Egypt in Early Modern Italy*, Chicago – London: The University of Chicago Press, 2007.

[13] 邦訳は以下のとおり。ホラポッロ『ヒエログリフ集』、伊藤博明訳、ありな書房、2019 年。

[14] ルネサンスのヒエログリフについては以下を参照。Iversen, *op.cit.*; Karl Giehlow, “Die Hieroglyphenkunde des Humanismus in der Allgegorie der Renaissance,” *Jahrbuch der Kunsthistorisches Sammlungen des Allerhöchsten Kasiserhauses*, 32 (1915), pp.1-229; Patrizia Castelli, *I geoglifici e il mito dell’Egitto nel Rinasicmento*, Firenze: Edam, 1979; Ludwig Volkmann, *Bilderschriften der Renaissance. Hieroglyphik und Emblematik in ihren Beziehungen und Fortwirkungen*, Leipzig: Hiersemann, 1922; Rudolf Wittkower, “Hieroglyhphs in the Early Renaissance,” in Idem, *Allegory and the Migration of Symbols*, London: Thames and Hudson, 1977, pp.114-128［ウィトカウワー『アレゴリーとシンボル――図像の東西交渉史』、大野芳材・西野嘉章訳、平凡社、1991 年］. 伊藤博明『綺想の表象学――エンブレムへの招待』、ありな書房、2007 年、第 1 章。

成されたと説いている。

これら二つの発見を受け継いで、17 世紀のエジプトマニアを具現した最大の人物は、ドイツ人のイエズス会士アタナシウス・キルヒャー（1602-1680）である[15]。彼の壮観な３巻本『エジプトのオイディプス』（*Oedipus Aegyptiacus*）から、エジプト人の神学の秘密について語っているところを引用しよう。

> ヤンブリコスが証人だが、ヘルメスは神的な事柄の観照に関係する数多くの書物を著し、それらをヒエログリフの文字で表した。それは秘かに隠された秘儀で満ちていたので、彼は哲学者という名ではなく、また予言者という名も得た。彼は、古代の宗教の滅亡を、信仰の始まりを、キリストの降誕を、未来の裁きを、世の再生を、祝福された者たちの栄光を、罪ある者たちの処罰を予言している[16]。

この言葉の後半部は、実はフィチーノ訳『ピマンデル』の「要旨」に見られるもので[17]、キルヒャーもまたフィチーノ同様に、ヘルメスの教説の中に、キリスト教の先駆的予言を読み込もうとしている。その表現手段としてのヒログリフという「聖なる文字」についてキルヒャーは、エジプト人は「言論や、動詞と名詞の組み合わせではなく、自然と神性の最高の秘儀の十全な意味を含む象徴と形象によって形成するのが常であった」と記している[18]。

したがって、すでにフィチーノが述べていたように、ヒエリグリフの孕む「多重性や可動性」を捉えることによって、そこに内在する秘儀的教説を明らかにしなければならない。キルヒャーは自らの方法を「理念的な読み」（lectio idealis）と呼んでいるが、そのような、いわば直観的な読み方は、ド・ジェブランがタロット・カードのエジプト的な起源を説明する際にも見られたものである。先に、ド・ジェブランによる古代神話の寓意的解釈について

---

[15] キルヒャーについては以下を参照。ジョスリン・ゴドウィン『キルヒャーの世界図鑑――よみがえる普遍の夢』、川島昭夫訳、工作舎、1986 年。伊藤博明「キルヒャーとオベリスク」、『19 世紀研究』、第９号（2015 年３月）、39-72 ページ。

[16] Atanasius Kircher, *Oedipus Aegyptiacus*, Roma, 1652-54, Classis XII, tom.2-2, pp.498-499.

[17] Cf. Marsilio Ficino, *Argumentum in librum Mercurii Trismegisti*, in *Opera omnia*, Basel, 1576, p.1836.

[18] Kircher, *Obeliscus Aegyptiacus*, Roma, 1666, p.16.

触れたが、ヒエログリフの読解への関心を含むエジプトマニアの人文主義的伝統をも、ド・ジェブランは受け継いでいたと評することができるだろう。

ナポレオンがエジプト遠征を行っていた 1799 年に、エジプトの湾岸都市のロゼッタで、ヒログリフ・デモティック（民衆文字）・ギリシア語という三つの文字で同じ内容が彫られた石碑（前 196 年にプトレマイオス５世によって発布された勅令）が発見された。この石碑をもとにヒエログリフ解読の鍵をジャン＝フランソワ・シャンポリオン（1790-1831）がフランス学士院で発表するのは 1822 年、すなわちド・ジェブランの「タロット・ゲームについて」から 41 年後のことである。

以下の翻訳の原題は以下のとおりである。

Du Jeu des Tarots, Où l’on traite de son origine, où on explique ses Allégories, & où l’on fait voir qu’il est la source de nos Cartes modernes à jouer, &c, &c.

底本は、『原初世界』の当該論文を復刻し、ジャン＝マリー・ロートによる有益な解説と詳細な註解を付した以下である。

Court de Gébelin, *Tarot*, présente et commenté par Jean-Marie Lhôte, Paris: Berg International éditeurs, 1983.

翻訳にあたっては、以下の英訳を参照した。

“The Game of Tarots” by Antoine Court de Gébelin,” in Donald Tyson, *Essential Tarot Writings: A Collection of Source Texts in Western Occultism*, Woodbury, Minnesota: Llewllyn Publications, 2020, pp.21-68.

なお、紙幅の関係で第３項～第８項は省略した。［　］は訳者による補足である。

アントワーヌ・クール・ド・ジェブラン

タロット・カードについて――その起源について論じられ、その寓意について解明され、われわれの現代のゲーム用タロットの起源が明らかにされる。

Ⅰ　一冊のエジプトの書物の発見が惹き起こした驚嘆

もし人々が、古代のエジプト人の一冊の著作が、彼らの壮麗な図書館を焼き尽くした炎から逃れた書物の一つが、そして興味深い事柄についての、きわめて精妙な教説を含んでいる一冊が、今もわれわれの許に存在していると告げられるのを耳にしたならば、すべての者は、疑いもなく、かくも貴重で、かくも突飛な書物を熱心に知りたがるであろう。もしわれわれが、この書物がヨーロッパの大部分において広く流布していると、そして、数多くの世紀ののちに、万人の手の内にあると付け加えるならば、この驚嘆は増すばかりであろう。もし人々が、これまで誰もそれがエジプトのものだと思わなかったと、誰も所有していないような形でしか所有していなかったと、誰もその一ページをもけっして解読しようとはしなかったと、そして、この洗練された知恵の果実が、それら自体では何の意味ももたない常軌を逸した図像の堆積と見なされていると主張するならば、この驚嘆は頂点に達しないであろうか。人々が聞き手の軽信で遊び、それを楽しんでいることを信じないというのであろうか。

Ⅱ　このエジプトの書物は実在する

しかしながら、次の事実はまったく真実である。すなわち、このエジプトの書物は、その壮麗な図書館から唯一残存したもので、今日も存在している。それはきわめて一般的なものなので、いかなる賢者もあえて留意することはなかったし、また誰もわれわれ以前は、その輝かしい起源について推測しなかった。この書物は 77 枚の、あるいは 78 枚の紙葉、すなわちカードから構成され、それらは５つのクラスに分割され、その各々は、多様であるとともに愉快で、教育的な対象を提示している。この書物は、一言でいえば、「タロット・ゲーム」（Jeu de Tarots）であり、たしかにパリでは知られていない遊びであるが、しかしイタリア、ドイツ、同様にプロヴァンスではよく知られており、そして、そのカードの各々が与えている図像は、多様性に富むとともに奇妙なものである。

それが使用されている地域は広大であるが、それが提示しているように思われる奇妙な図像の価値については、誰も探究することはなかった。こうして、その古代の起源については、時代の暗闇の中に埋もれてしまい、それがどこで、いつ創出されたかについて、また、多くの異例な図像から成っているモティーフについて誰も知らず、そして、その全体として与えられる謎について誰も解き明かそうと努めることはなかった。

このゲームは注意を払うにはほとんど値しないものとさえ思われて、カードの起源については気にかけるわれわれの賢者たちの考察の対象にはけっしてならなかった。彼らが語るのは、パリで使用されているフランスのカードであり、その起源はあまり古くはない。そして、彼らはそれが近代の着想であることを証明して、事柄をすべて明らかにしたと信じている。こうして、実際に、人々はいつも、ある国のある知識を原初の着想と混同してしまう。それはわれわれが羅針盤について示したことである。ギリシア人自身とローマ人自身は、諸対象をひどく混同するだけであり、われわれから多くの興味深い起源についての知識を奪っている。

ところで、このゲームとそれが供する図像の形態、配置、配列は明らかに寓意的（allégorique）であり、これらの寓意は古代のエジプト人の市民的、哲学的、宗教的教説に合致しているので、そこではこの賢者である民族の営為として認める以外にはない。彼らだけがこのゲームの着想者であることが可能であり、この点で、チェス・ゲームを着想したインド人に匹敵する。

部門

われわれは、このゲームの多様なカードがもたらす寓意を理解させる。
それが構成されるための数的な定式。
いかにしてそれはわれわれに到達したのか。
それと中国のモニュメントとの関係。
いかにしてスペインのカードは生まれたか。
この最後のカードとフランスのカードの関係。

この試みに続くのは、いかにしてこのゲームが予言（Divination）の術に適

用されるのかを明らかにする論考である[19]。それは将官、州の長官の仕事であるが、彼はわれわれに好意を示してくれて、きわめて才智の溢れた明敏さを発揮し、このゲームの中にカードによる予言術のエジプト人の原理を、すなわち、誤って、ヨーロッパ中に広まるジプシー[20] と名づけられたエジプト人の最初期の一団が認めた原理を見いだした。そして、そのいくつかの痕跡はわれわれのカード・ゲームの中に存在しているが、その単調さと少ない数の図像では予言には用いることはまったくできない。

反対にエジプトのゲームは、この効果に驚嘆するほどに適しており、ある仕方で宇宙全体と、人間がこうむる人生の様々な境遇を含んでいる。この民族はきわめて特異で、かつ深遠であるので、彼らの仕事のもっとも小さなものにも不滅性の徴を刻印しているが、一方、他の民族はいかなる点においても、彼らの痕跡をほとんど辿ってはいないと思われる。

第１項　タロット・ゲームがもたらす寓意

もし、このゲームがそれを知っている者たちすべてにとって常に曖昧であったのに対して、われわれの眼に明らかにされたとすれば、それは何か深い瞑想の結果ではなく、またカオスを解決しようとする欲求の結果でもない。われわれは、即座にそれについて思いついたわけではない。数年前、われわれの友人の中の女性で、ドイツかスイスから到着した C. d'H 夫人[21] と会うように招待されて、われわれは彼女が、他の人々とともにこのゲームに夢中になっているのを見いだした。われわれは、あなた方が確実に知っていないゲームを楽しんでいる……おそらく。それは何だろうか。タロット・カードですって……私はたいへん昔にそれを見る機会があったが[22]、いかなる考えも浮か

---

[19] ド・ジェブランの論考に続いて『原初世界』に収められた M. le C. de M. ***（実際はド・メレ）の論考「タロットについて、およびタロット・ゲームによる予言についての探究」を指している。

[20] 「ジプシー」と呼ばれていた「ロマ」は、かつてはエジプト起源であると信じられていた。現在は、９世紀ごろにインド北西部に発生したと考えられている。

[21] エルヴェティウス夫人（Madame de C. d'Helvétius, 1719-1800）。

[22] おそらくは、ド・ジェブランが少年期をスイスで過ごしたことへの言及。

ばなかった……。

それはきわめて奇妙で、きわめて異様な図像の寄せ集めである。たとえば、ここに一つのセットがあり、そこから図像がつまったカードを慎重に選ぶのだが、それは名前と関係のないもので、「世界」（Monde）である。私はそれに目をやり、たちまち、その寓意について知ることになった。皆がゲームを止めて、彼らが気づかなかったことを私が気づいた、この驚くべきカードを見にやってきた。皆は私に別のカードを示した。

一五分ほどで、私はゲーム・カードを通覧し、説明し、エジプトのものであると明言した。そして、それはわれわれの想像力の戯れではまったくなく、エジプト人の諸観念とわれわれが認識しているものすべてと、このゲームの熟慮された、意味深い関連の結果であるので、われわれはいつの日にか、民衆ともそれを分かちあうことを誓った。私は、その発見と自然の贈り物は快いものであり、このエジプトの書物は野蛮さから、時の破壊から、偶然あるいは故意の火災から、さらにもっとも破壊的な無知から逃れたものであることを確信した。

この書物の軽薄で浅薄な形態の必然的な結果として、それはあらゆる時代に打ち勝ち、われわれまで珍しくも忠実に伝えられてきた。それが表していることにこれまで人々が示してきた無知自体が、誰にもそれを消滅させることを考えさせたことはなく、あらゆる世紀を静穏に過ごさせてきた、幸運で安全な営為だったのである。

今こそ、保持することを定められていた諸寓意を発見し、もっとも賢明な民族において、ゲームを含むすべてが寓意に基礎づけられていたことを明らかにし、そして、その賢者たちがもっとも有益な知識を娯楽へと変え、それでゲームをすることさえ可能にしたことを明らかにする時である。

われわれがすでに述べたように、タロット・カードは 77 枚、あるいは 78 枚から構成されており[23]、切り札（Atours）とスート（couleurs）に分かれている。読者の方々がわれわれの議論を追うことができるように、切り札と、われわれがスペイン人に従って「スパディッレ」（Spadille）、「バステ」（Baste）、

[23] 「愚者」は伝統的なパックでは数えられていないが、ド・ジェブランは第 78 枚目としている。

「ポンテ」（Ponte）と呼んでいる、各々のスートのエース（As）を版画で描かせた[24]。

切り札

22 枚の切り札は一般的に、現世の社会の霊的な長たち、農業の自然的な長たち、枢要徳、結婚、死と復活、あるいは創造、運命の様々な遊戯、賢者と愚者、すべてを焼き尽くす時、などを表す。われわれはそれらを一つずつ考察し、それらの各々が秘めている寓意、あるいは固有の謎を解明するように努めよう。

［図版Ⅲ］

第０番　愚者（Le Fou）

そのマロット[道化師の錫杖]、その貝と鈴のついた野良着ゆえに、このカードの中で「愚者」を見まちがうことはありえない。彼は、まさに狂人がそうであるように、とても速く歩き、背中に小さな袋を下げ、それによって彼の尻を噛む一頭の虎から逃れようと思っている。この袋については、それは自分で見ようとはしない彼の過失の徴であり、そしてこの虎については、それは彼を足早に追ってきて、背後から臀部に飛びつく、彼の後悔の徴である。

ホラティウスが黄金［の詩］[25] の中に巧みに挿入したこの見事な理念は、彼がつくったものではなかったが、エジプト人から忘れされることはなかった。それは通俗的な理念で、月並みな表現ではあったが、常に真実な〈自然〉において受けとられ、自然が可能とするあらゆる優美さによって表されたので、この快活で賢い詩人はそれを自らの深遠な判断から引き出したように見えた。

---

[24] 描いたのはド・ジェブランの友人のリノート嬢（Mademoiselle Linote）である。

[25] ホラティウス（前 65～前８年）は古代ローマの詩人で、詩作のほか、『詩論』は後代に大きな影響を及ぼした。彼の『諷刺詩』第２巻第３歌を参照。「以上が、七賢人に次ぐ／ステルティウスが友人の／私にくれた武器なのです。／もしもだれかが、この私を／狂人扱いするならば、／手ひどくやられることでしょう。／わしを狂人などという／奴らは、同様、狂人の／扱いを受け、知らぬ間に／自分の尻にもついている／尻尾をはっきり知らされます（鈴木一郎訳、『ホラティウス全集』、玉川大学出版部、2001 年、146 ページ）。

この切り札（Atout）は、ゲームの中で第 21 番目の後に置かれているが、われわれはそれを「ゼロ」と呼ぶ。というのは、それは単独ではけっして数えられず、他のものに与える価値だけを有するからである。まさにそれはわれわれの「ゼロ」のようなもので、こうして、何ものも自らの狂気なしには存在しないことを示している。

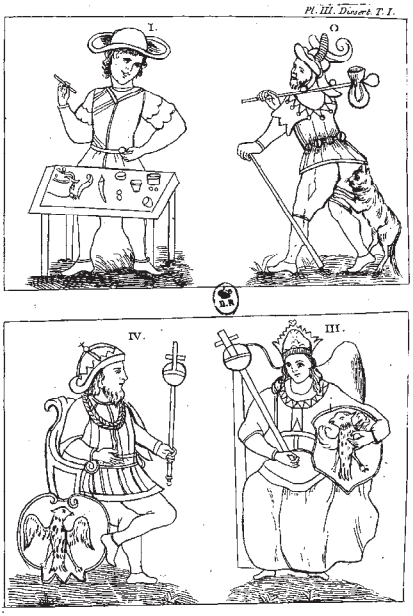

図２　ド・ジェブラン「タロット・カードについて」　図版Ⅲ

第１番　コップの使い手、すなわち奇術師（Le Joueur de Gobelets ou Bateleur）

われわれは第１番から始めて、第 21 番までたどることにしよう。というのは、実際の使用にあたっては、最小の数から始めて、そこからより大きな数へと昇っていくからである。しかしながら、エジプト人は最高のものを数えることから始めて、そこから最低のものまで降りていたように思われる。このようにして彼らは、一オクターヴを降りながら歌うのであり、われわれのように昇るのではない。

この論考に続く論考においては、エジプト人の使用法に従っており、そしてそれを最大限に利用している。それゆえ、ここには二つのやり方があることになるだろう。すなわち、これらのカードをそれら自体だけを考察しようとするときの、われわれのもっとも容易なやり方と、そして、カードの全体とそれらの関係をよりよく考えるために有益な、別のやり方である。

すべてのカードの中で、昇っていく最初のもの、あるいは降っていく最後のものは、「コップの使い手」（Jouer de Gobelet）である。彼については、骰子、コップ、小刀、球などで占められたテーブルから、彼のヤコブの棒、あ

るいは三博士（マゴイ）の杖から、そして彼が二本の指でつかみ、巧みに隠してしまう球から明らかである。

カード製作者たちの間では、「奇術師」（Bateleur）と呼ばれる。それは、この境遇にある者たちの一般的な名称である。彼［の名称］が「桶」（baste）や「棒」（bâton）に由来することを述べる必要があるだろうか。

すべての境遇の先頭にあって、彼は人生全体が夢にすぎず、手品にすぎないことを示している。すなわち、人生は偶然の、あるいは、われわれにはけっして依存しない一千の事態の衝撃をもたらす永遠のゲームのごときもので、そのゲームによって、必然的にあらゆる一般的な執行は甚大な影響を被る。

しかし、愚者と手品師の間で、どちらの人間が好ましいであろうか。

［図版Ⅲ—Ⅳ］

第２番・第３番・第４番・第５番

社会の長たち（Chefs de la société）

第２番と第３番は二人の女性を表し、第４番と第５番は彼女たちの夫たちを表している[26]。彼らは現世の社会の霊的な長である。

王と女王（Roi & Reine）

第４番は王を、第３番は女王を表している。二人はともにアトリビュートとして、楯の中の鷲を、そして、卓越性の徴である、「タウ」

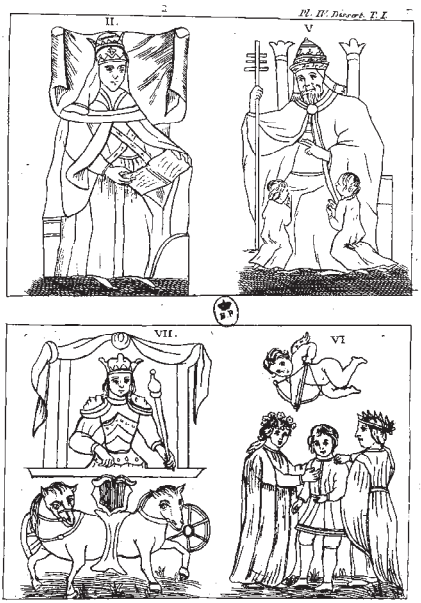

図３　ド・ジェブラン「タロット・カードについて」　図版Ⅳ

[26] 第２番と第５番のカードの伝統的なフランス語の名称は「女教皇」（La Papesse）と「教皇」（Le Pape）であり、通例、これら二人が結婚しているとは考えられない。一方、ド・ジェブランはエジプトの大祭司と女大祭司と見なしており、実際に古代エジプトでは結婚することも可能であった。

（Thau）と呼ばれる十字架[27] で飾られた球体を載せた錫をもっている。

王は側面を、女王は正面を見ている。二人はともに玉座の上に据わっている。女王は引き裾の衣服をまとい、玉座の背は高くなっている。王はゴンドラ、あるいは貝型の椅子の中にいるようであり、彼の両脚は交差している。彼の王冠は半円形で十字架を伴った真珠を載せている。女王の王冠は先が尖っている。王は騎士の勲章を身につけている。

大祭司と女大祭司（Grand-Prêtre et Grande-Prêtresse）

第 5 番は祭司たちの長、すなわち大祭司を表しており、第 2 番は女大祭司、すなわち彼の妻を表している。エジプト人の間では聖職者の長たちが結婚していることが知られている。もしこれらのカードが現代人の発明であるならば、そこに女大祭司を見いださないだろうし、さらには、ドイツのカード製作者たちが奇妙にも名づけているような、女教皇の名称を見いだすこともないであろう。

女大祭司は肘掛け椅子に座っている。彼女は長い衣服を身につけ、一種のヴェールが彼女の頭部から降りて胸部で交差している。彼女はイシスがもっていたような、二重の角のある二重の冠をかぶっている。彼女は膝の上に、一冊の開いた本を置いている。十字架がついた二本の飾帯が胸のところで交差し、そこで「X」をつくっている。

大祭司は長い衣服を身につけ、大きなマントには留め金がついている。彼は三重の冠をかぶり、一方の手で三重の十字がついている錫を支えもち、他方の手では、二本の指を伸ばして、彼に跪いている二人の人物に祝福を与えている。

このゲームを購入者に渡したイタリアやドイツのカード製作者は、これら二人の人物を、われわれが大修道院長と女子大修道院長を呼ぶように、古代の人々が「父」と「母」と名づけた者としている。この東方の言葉は同じ意味を有しており、それゆえ、彼らは教皇と女教皇と呼んだのである。

---

[27] 「タウ」と呼ばれる十字架とは、ギリシア語のアルファベットのタウに由来するが、ここで示されている十字架はキリスト教徒にとっての一般的な形態を指しているのだろう。

三重十字架の錫については、それはまったくエジプトのモニュメントである。それはイシス板[28] の上に、‘TT’という文字の下に見られる。この貴重なモニュメントを、われわれはすでに、いつの日にか公衆の面前に供するために、その大きさどおりに版画に彫らせてある。彼女は、パミュレの有名な祭日[29] に人々が持ち運ぶ三重のファロスと関係している。その祭日には、人々はオシリスが再び見いだされたことを喜ぶのであり、ファロスは植物と自然全体の再生の象徴であった。

第７番　勝ち誇るオシリス（Osiris Triomphant）

次に続くのはオシリスである。彼は、手に錫をもち、戴冠している、勝ち誇る王の姿のもとに現れる。彼は二頭の白馬が曳く戦車の中にいる。誰もが知っているように、オシリスはエジプト人の偉大な神であり、またシバの人々にとっても同様の存在だったのであり、あるいは、不可視の至上の神性の、物体的な太陽という象徴であるが、自然の傑出したものに自らを顕す者である。彼は冬の間は失われているが、春には新しい輝きとともに、彼に戦争をしかけるすべてのものに勝利して再び現れる。

---

[28] ここで「イシス板」（la Table d’Isis）と呼ばれているのは、「イシスのテーブル」（Mensa Isaiaca）あるいは、最初の所有者であるピエトロ・ベンボ枢機卿（1470-1547）にちなんで「ベンボ板」（Tabula Bembiana）と呼ばれている、古代のブロンズ製の食卓の上板である。それは 1525 年にローマで発見されて、すぐに貴重な古代の遺物として注目を浴び、古銭研究家のエネアス・ヴィーコ（1523-1567）は 1559 年に銅版画で複製している。「イシスのテーブル」では、中央の神殿の中にイシスのような女神が描かれ、数多くのエジプトの神々、神官、ファラオが配され、それらの周りにヒエログリフを伴っている。これらのヒエログリフは、形状的には古代エジプトのヒエログリフに近いが、しかし何かの意味を形成しているわけではない。

[29] 「パミュレの祭日」（Fête des Pamylies）とはエジプトの春分の日にあたり、セト（テュポン）によって切断されて捨てられたオシリスのファロス（陰茎）をイシスが蘇生させたことが祝われる。プルタルコスは次のように伝えている。「第一日目にはオシリスが生まれ、その誕生と同時に声が響き、『万物の主なる神、光の中に進みたもう』、と言ったと申します。テバイで水汲みをしていたパミュレという女が、ゼウスの神殿からこの声が響いてくるのを聞いた、と言う人もあります。この言い伝えですと、その声は『大いなる王位して恵みの施し手オシリス、今生まれたまいぬ』、と呼ばわったということです。そこでパミュレは、クロノスが委ねてくれたことでもあるし、オシリスを育てました。人々はパミュレのために祭を祝いますが、それはディオニュソスに捧げる男根棒持の行列に似ています」（『エジプト神オシリスとイシスの伝説について』12、柳沼重剛訳、岩波文庫、1996 年、31 ページ）。

第６番　結婚（Le Mariage）

若い男性と若い女性が相互の信頼を誓っている。司祭が彼らを祝福し、〈愛〉が彼らに矢を放っている。カード製作者はこの図版を「恋人」（Amourex）と呼んでいる。彼らによって確かに、この絵画がより眼に訴えかけるようにするために、弓と矢をもつ〈愛〉が加えられたように思われる。

ボワサールの「古代の遺物」（Antiquités）の中に（第３巻図 36）[30]、夫婦の和合を描くための、同じ性質のモニュメントが見いだされるが、それは三人の人物から構成されている。

愛する男性と愛する女性は互いの信頼を誓い、そして、二人の間で〈愛〉は証人と司祭を務めている。

この絵画は「信頼の像」（Fidei simulacum）、「夫婦の信頼の絵画」と題されている。それらの人物は、真理、名誉、愛という美しい名前で呼ばれている。言うまでもないことだが、真理は男性よりも女性によって示される。その理由は、この言葉が女性名詞であるからだけはなく、また揺るがない信頼は女性においてより本質的だからである。この貴重なモニュメントは、「T」という名の者によって建てられた。フンダニウス・エロメヌスは愛すべき者で、彼がとても愛する妻、ポッペエ・デミトイレと、彼が慈しむ娘、マニリア・エロメニスを伴っている。

図版Ⅴ

第８番・第９番・第 12 番・第 13 番　４つの枢要徳（Les quatre Vertus Cardinales）

われわれがこの図版にまとめた形象は、4 つの枢要徳に係わるものである。

第 11 番　これは力（Force）を表している。それは、ライオンの女主人となる女性で、小さなスパニエル犬の口を開けるように容易に、ライオンの口を開けている[31]。彼女は頭の上に女羊飼いの帽子を載せている。

---

[30] ジャン・ジャック・ボワサール（Jean Jacques Boissard）がパリで 1597 年から 1602 年にかけて刊行した『ローマ市の地誌と古代の遺物』（*Romanae Urbis topographia et antiquitates*）第３巻図 36 への言及。

[31] 別の解釈では、「力」あるいは「剛毅」を表す女性は、ライオンの口を開けるのでは

第 13 番　節制（Tempérance）。一方の壺の水を別の壺の中へ移して、後者に入っている酒を和らげている[32]、羽根をもつ女性。

第８番　正義（Justice）。それは女王であり、玉座に据わるアストライア[33] であり、一方の手に剣を、他方の手に天秤をもっている。

第 12 番　賢慮（Prudence）は、４つの枢要徳の中に数えあげられている。エジプト人は、人間の生についてのこのカードの中に、それを入れるのを忘れたのであろうか。しかしながら、このゲームの中にそれを見いだすことができない。「力」と「節制」との間の第 12 番の場所に見られるのは、足から吊り下げられた男である。しかし、なぜ彼は吊り下げられているのだろうか。それは邪悪でうぬぼれたカード製作者の仕業であり、彼はこのカードの下に潜んでいる寓意の美を理解することなく、自分自身で勝手に直して、そのことによってカードをまったく損なってしまった。

図４　ド・ジェブラン「タロット・カードについて」　図版Ⅴ

賢慮は、立った男性によってはじめて、眼に感じとられる仕方で表すことができる。彼は一方の足を置き、他方の足を進ませ、確実に置くことのできる場所を探しつつ、宙に浮かせている。それゆえ、このカードのタイトルは「宙づりの足（pede suspenso）の男」であった。カード製作者はここで意味

なく閉めている。

[32] 古代ギリシアの時代から、ワインは水で割って飲まれた。

[33] ギリシア神話において、アストライアはゼウスとテミスの娘で、正義を表す処女神である。黄金時代には人間たちの間で暮らしていたが、人類の悪徳が大きくなるとそれを避けるために天上に昇った。黄道十二宮の処女宮と結びつけられる。

されていることが判らず、「足から吊り下げられた男」としたのである。

そこで、なぜこのゲームに「吊り下げられた男」が存在するのかとある者が問うた。ある者はこう答えた。それは、女教皇を表したことに対する、ゲームの発案者への正当な罰である、と。

しかし、力、節制、正義の間で、そこには賢慮が望まれており、最初は表されていたにちがいないと、誰が思わないであろうか。

図版Ⅵ

第８番［第９番］　賢者、すなわち真理と正義の探究者（La Sage ou le Chercheur de la Verité & du Juste）

第８番［第９番］は哲学者を表し、彼は長いマントを身につけ、両肩をフードで覆っている。彼は杖を支えにして身をかがめて歩き、左手に角灯をもっている。それは、正義と徳を探求する賢者である。

それゆえ人々は、このエジプトの絵画に基づいて、手に角灯をもち、日中の最中に「人間」を探求するディオゲネスの物語を想像した[34]。とりわけ格言的な、この巧みな話はあらゆる時代に存在する。そして、ディオゲネスは、この絵

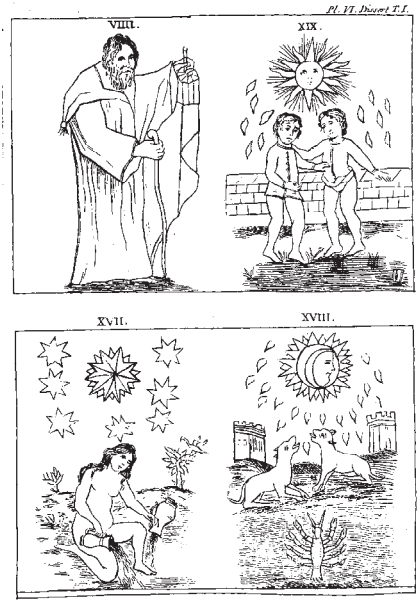

図５　ド・ジェブラン「タロット・カードについて」　図版Ⅵ

[34] シノペのディオゲネス（前 404 年頃～前 323 年頃）。犬儒（キュニク）派の哲学者として放浪し、皮肉と機知と諧謔にみちた言動が伝えられている。ド・ジェブランの述べている逸話は、３世紀前半の哲学史家ディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』第６巻第２章 42 が伝えている。「彼は白昼にランプをともして、『ぼくは人間を探しているのだ』と言った」（加来彰俊訳、『ギリシア哲学者列伝』（中）、岩波文庫、1989 年、144 ページ）。

画を行為に移した人物だった。

カード製作者はこの賢者を隠者（Hermite）とした。それは十分に理由のあることである。すなわち、哲学者は自ら進んで隠遁して生きるのであり、時代の軽薄さに身をさらすことはけっしてないのである。ヘラクレイトス[35] は、一緒に住む親しい市民たちから狂人のように思われた。さらに東洋では、観照的な学問に身を捧げることと隠遁することは、ほとんど同一のことである。エジプトの隠者は、この点においてインドの隠者やシャム［タイ］の僧侶にはまったく似ていないが、ドルイド僧とはほぼ同じであったし、または同じである。

第 19 番　太陽（Le Soleil）

われわれはこの図版の中に、光に関連するすべてのカードをまとめた。隠者の秘かな角灯に従うように、われわれは、すべてこのゲームの中で様々な象徴とともに形象化された、太陽、月、輝くシリウス、すなわち煌めく「犬の星」（Canicule）について瞥見することにしよう。

太陽はここで、人類と自然全体の物質的な父として表されている。それは社会において人間たちを照らし、彼らの町々を司る。その光線によって黄金と真珠の涙を蒸留する。このように人々は、この星の幸運をもたらす影響を示している。

このタロット・ゲームは、次の項においてさらに詳しく見るように、エジプト人の教説と、ここでは完全に合致している。

第 18 番　月（La Lune）

太陽に従って進む月もまた、黄金と真珠の涙を伴っており、それによって、月が自らの側からも地上の利益に寄与していることを同様に示している。

---

[35] エペソスのヘラクレイトス（前 500 年頃）。尊大な性格と晦渋な叙述のスタイルから「暗き人」とか「謎をかける人」と呼ばれた。「パンタ・レイ」（万物流転）という、事物の流動性を説く「同じ川は二度入ることはできない」という言葉が有名である。彼の奇異な言動や振る舞いについては、ディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』第 9 巻第 1 章が伝えている（加来彰俊訳、『ギリシア哲学者列伝』（下）、岩波文庫、1994 年、91 ページ以下）。

パウサニアスがフォキス人についての記述においてわれわれに教示しているところでは、エジプト人によれば、イシスの「涙」が毎年、ナイル川の水を氾濫させ、こうしてエジプトの土地を肥沃にする[36]。この国の歴史書はまた、月から落ちる「滴」、すなわち涙について語っており、そのときにナイル川の水は増大するのである。

このカードの下には、ザリガニ、あるいは蟹が見いだされるが、それは月の後戻りする進行を示すためか、太陽と月が蟹の星座［巨蟹宮］から出るとき、次のカードにおいて見るように、「犬の星」の上昇のときに、それらの涙によって洪水が引き起こされることを示すためである。

これら二つのモティーフを結びつけることもできるだろう。というのも、しばしば解きがたい一塊を構成している多くの帰結によって自らを確定するというのは、きわめて普通のことではないだろうか。

カードの中央には二つの塔が占め、各々の塔は両端にあり、有名なヘラクレスの二つの柱[37] を示している。それらの柱の手前を、また向こう側を、これら二つの偉大な光明［太陽と月］も通り過ぎることはできない。

二つの柱の間に二匹の犬がいて、月に向かって吠え、月を見張っているように見える。それは完全にエジプト的な観念である。この唯一無二の民族は、寓意によって、両回帰線の各々を一匹の犬が護る、二つの宮殿になぞらえた。それらは忠実な門番に似ており、星々が天の領域において、二つの極のどちらの方へも流れていかないように保っている。

---

[36] リュディアのパウサニウスは２世紀のギリシアの歴史家・旅行家で、『ギリシア案内記』（第 10 巻第 32 章）で次のように述べている。「これに似た話を私はフェニキアのある男から聞いたことがある。すなわち、エジプト人たちはイシス女神の祭礼を催すのだが、それは彼らの言によれば、同女神がオシリス神を悼むとされているときに当たっている。そのときネイロス（ナイル）川が増水しはじめるのであって、地元住民の多数に言わせれば、同河川を増水させ、耕地を冠水させるのはイシス女神の涙だという」（馬場恵二訳、『ギリシア案内記』（下）、1991 年、岩波文庫、301 ページ）。

[37] 「ヘラクレスの柱」（Les colonnes d’Hercule）とは、現在のジブラルタル海峡の入口の岬に対する、古代の人々による呼称。ヘラクレスの十二功業の第 10 番目の話では、西方のある島の牡牛の捕獲を命じられたヘラクレスが、牡牛の番をしていたゲリュオンという、身体が３つで脚が２本の怪物を殺して、牡牛の群れを主君のもとに持ち帰った。その遠征の途中で、アトラス山中のアビュラ山とカルペ山（別名ジブラルタルの岩）の間に海峡を押し開いたため、両山は「ヘラクレスの二柱」として知られるようになった。

それは、われわれの間の注釈たちの夢想ではけっしてない。クレメンスは、彼自身がアレクサンドリア出身のエジプト人で、それゆえ、何事かを知っていたはずであるが、彼はわれわれに『綴織』（すなわち『ストロマテイス』第５巻）の中で、エジプト人は両回帰線を二匹の犬の形象のもとに表したと確証している[38]。これらの犬は、門番もしくは忠実な守衛に似ていて、太陽と月がさらに遠くに入り込み、両極まで至らないように防いでいる。

第 17 番　犬の星（La Canicule）

ここでわれわれは、少なからず寓意的で、完全にエジプト的なカードを目にしている。それは「星」と名づけられている。実際に、そこには一つの輝く星が見いだされ、その周りに他の７つのより小さな星が存在している。このカードの下部は、跪いた女性によって占められ、彼女は二つの逆さにされた壺をもち、そこから二つの川が流れ出ている。この女性の側には川の上に一羽の蝶々が見られる。

これはまったく純粋にエジプト的なものである。

とりわけ、この星は「犬の星」すなわちシリウス（Sirius）である。この星は太陽が蟹の星座［巨蟹宮］から出るときに昇るのであり、そこで先のカードは終わり、すぐにこの星がそれに続く。

この星を取りまき、それを中心に宮廷をつくっているように見える７つの星は惑星である。この星はある意味でそれらの女王である。というのは、この星はこの瞬間に一年の始まりを定めるのであり、それらはこの星をめぐっ

---

[38] アレクサンドリアのクレメンス（150 頃～215 頃）は初期ギリシア教父を代表する一人。アテナイで生まれ、地中海付近の各地を遍歴したのち、アレクサンドリアでパンタノイスに師事し、のちに師の後を継いでその教理学校の校長を務めた。数年後にローマ皇帝セプティムス・セウェルスの迫害に遭い、カッパドキアに逃れて客死した。クレメンスは旧約聖書の伝統のうえに、ギリシア哲学の遺産も摂取して、キリスト教神学の礎をつくった。現存する著作には『ギリシア人への勧告』、『教育者』、『ストロマテイス（綴織）』がある。『ストロマテイス』第５巻第７章 41 を参照。「（エジプト人の中には）また、二匹の犬によって二本の回帰線が表されていると解する人々もいる。彼らによれば、犬は南と北に位置する行路を見守り、門番をするという。そして鷹は灼熱の赤道を表し、朱鷺は黄道を意味するとされれる」（秋山学訳、『アレクサンドリアのクレメンス２　ストロマテイス（綴織Ⅱ）』、「キリスト教教父著作集」第４巻Ⅱ、教文館、2018 年、44 ページ）。

て進路を決めるために、それらの秩序を受け入れるように思われるからである。

下方にいる、この瞬間に壺の水を注ぐのに大きな注意を払っている女性は、天の支配者であるイシスであり、彼女の恩恵に、「犬の星」の上昇から始まるナイル川の氾濫が帰せられている。この理由のゆえに、「犬の星」はイシスに捧げられており、この星はイシスの特別の象徴であった。

そして、一年がこの星の上昇といっしょに始まるので、それはソト・イス（Soth-Is）、すなわち一年の開始と呼ばれる。そしてこの名前のもとで、この星はイシスに捧げられていた。

最後に、彼女が支えている川と蝶々（Papillon）は、再生と復活の象徴であった。それらは同時に、イシスの恩恵の庇護を、「犬の星」の上昇を、そして、まったく何もなかったのに、新しい作物で覆われるエジプトの平野を示していた。

図版Ⅷ［図版Ⅶ］

第 13 番　死（La Mort）

第 13 番は死を表している。それは人間たちを、王も女王も、偉大な者も卑小な者も刈り取る。なにものも、その殺戮の大鎌に逆らうことはできない。

死がこの番号の下に置かれているのは驚くべきことではない。この 13 という数は不幸をもたらすものと見なされている。遠い昔、この数の日に、何か大きな厄災が起こったにちがいなく、その記憶が古代のすべての民族に伝えられていた。この記憶の連鎖のゆえに、ヘブライ人の 13 の部族は 12 の部

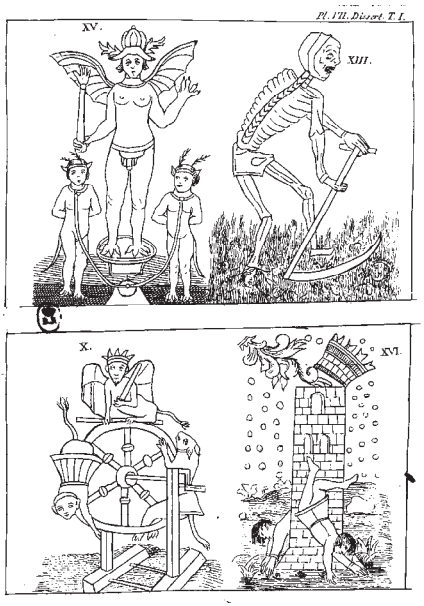

図６　ド・ジェブラン「タロット・カードについて」　図版Ⅶ

族として数えられてきたのではないだろうか。

われわれは、エジプト人が「死」を快活な想念を掻き立てるべきゲームに挿入したことも同様に驚くべきことではない、と付け加えよう。このゲームは戦争のゲームであり、それゆえ「死」はその中に入るのである。こうして、チェスのゲームは「エシャック・マト」（王手詰み）、より適切には「シャ・マト」すなわち「王の死」によって終わる。さらにわれわれは、それを暦の中に想いおこす機会をもっている。すなわち、祝祭日において、この賢明で熟慮した民族は、「マネロス」という名称の骸骨が出現するようにしたが、それは疑いなく、会食者たちに大食によって死ぬことのないように勧告するためであった[39]。

第 15 番　テュポン（Typhon）

第 15 番はエジプトの著名な人物、オシリスとイシスの弟で、悪の根源、冥界の最大の悪魔であるテュポンを表している。彼はコウモリの翼、ハルピュイアの足と手をもっており、頭には雄鹿の不恰好な角がついている。彼は可能なかぎり醜く、また悪魔的に描かれた。足元には、長い耳、大きな尾をもつ二人の小悪魔がいて、背中で手を縛られている。彼らはまた、首に巻かれた紐に繋がれ、それはテュポンの台座に結ばれている。こうしてテュポンは自らに属するものを手放すことはなく、自らのものを愛する。

---

[39] ギリシアの著作家のプルタルコス（46 頃〜120 年頃）が伝える記述を参照。「さらに別の所伝もありまして、それによりますと、マネロスというのは神の名でもなく人の名でもなく、宴会で飲んで楽しんでいる人々が、『運命はかくてこそあれ』と唱和する文句だということです。エジプト人は何かにつけて『マネロス』と唱えては、こういう意味を表明しているのだということです。例えば、これは言うまでもないことで、死んだ人間の像を棺に納めて宴会の場にかつぎ込み、室内を一巡してそれを一同のものに見せる、などということをやるのも、ある人々が思いなしているように、オシリスの受難の思い出としてではなく、ほろ酔い加減の列席者たちに、程なく諸君もこうなるであろうゆえ、現在あるものを利用したまえ、今を楽しみたまえ、とすすめる、そこでこういう愉快でないものを歓楽の場に持ち込むのだというのです」（『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』17、同上訳、39-40 ページ）。

第 16 番　神の家、あるいはプルトスの城
（Maison-Dieu, ou Chateau de Plutus）

ここに、われわれは貪欲に対する教訓をもっている。このカードは「塔」（Tour）を表しており、それは「神の家」（Maison-Dieu）、すなわち「特別な家」と呼ばれる。それは黄金で一杯の塔であり、「プルトスの城」（Chateau de Plutus）である。それは崩壊して瓦礫となり、それを崇める者たちは残骸に押しつぶされる。

この全体について、われわれは、ヘロドトスが語っているエジプトの君主の物語から理解することができる。この君主はランプシニトスと呼ばれる者で、自らの財宝を蓄えるために石でできた巨大な塔を建てさせて、その鍵は彼だけがもっていた。しかし、この建造物に存在する唯一の門からは誰も入っていないにもかかわらず、彼の財宝が目に見えて減っていくのに気がついた。巧妙な泥棒を発見するために、この君主は財宝を収めている壺の周りに罠をはりめぐらすことを思いついた。泥棒はランプシニトスに仕えていた建築家の二人の息子だった。彼は一つの石に工夫をこらし、他人から気づかれることなく、そこから自由に出入りできるようにしたのだった。彼はその秘密を、周囲が目を見張るほどに自分に尽くしている息子たちに教えた。彼らは君主を奪いさり、塔から下へ飛び降りた。このように、彼らはここで表されている。

これが実際、『歴史』のもっとも優れた箇所であるが、ヘロドトスにはこの巧みな物語の続きが見いだされる。すなわち、二人の兄弟の一人が罠にかかったこと。彼が自らの頭部を兄弟に切らせたこと。彼らの母がその死体を持ち出すように必死にせがんだこと。彼が驢馬に乗せて酒の入った革袋とともに行き、死体と宮殿の番をする者を酔わせようとしたこと。彼らが作り涙を流しながら革袋を受け取り、眠り込んだこと。彼がすべての者の右側の髭だけを切り落とし、兄弟の死体を運び去ったこと。王はとても驚き、娘に向かって、彼女を愛する者たちに、自らが行なったもっとも巧妙な策術について語らせるように命じたこと。この抜け目ない若者が美しい女性の前に進み出て、彼が行なったことをすべて語ったこと。この大きな冒険を終わらせ、幸福な結末に導こうと、この王は自分の娘を、彼のことを翻弄した才智に満ちた若

者と、彼女にもっとも相応しい者として結婚させることを約束したこと。こうして、すべての者にとって大きな満足が得られたこと。

私は、ヘロドトスがこの物語を真実の歴史から採ったかどうかは分からない[40]。しかし、似たような小説やミレトスの寓話を案出できる民族は、きわめ容易に、いかなるゲームも創出できたのである。

この著作家は、われわれが暦の物語の中で述べたことを証しする別の事実について報告している。すなわち、様々な祝祭日に行進する巨人たちの像は、ほとんど常に四季を示しているということである。彼の語るところによれば、われわれが話したばかりの君主と同じランプシニトスは、ウルカヌスの神殿の北と南に、高さ 25 ペキュスの二つの像を建てさせ、それは「夏」と「冬」

---

[40] ヘロドトスは前５世紀の古代ギリシアの歴史家で、オリエントを広く旅行して『歴史』を著し、キケロによって「歴史家の父」と呼ばれた。ド・ジェブランの伝える物語は『歴史』第２巻（121）に見えるが、概要は以下のとおりである。祭司たちによれば、プロテウスから王位を受け継いだのはランプシニトス（ラムセス３世と目される）であった。この王は莫大な銀を所有していたが、この財宝を安全に保管したいと思い、王宮の一角に石造の部屋をつくらせた。ところがこの仕事を請け負った職人は、壁の中の一つの石だけは、容易に壁から外せるように細工をした。彼は死ぬ間際に、この秘密を二人の息子に明かした。息子たちは夜になると、例の石を取り外して多くの財宝を運びさった。財宝が減っていくことに気づいた王は罠をいくつも作らせた。ある夜、忍んできた一人は罠にかかってしまった。彼は兄弟に事情を話すと自分の首を切るように頼んだ。顔が判れば、兄弟も道連れになることは明らかだったからである。そこで兄弟は彼の首を刎ねて家に持ち帰った。首のない死体を発見した王は驚き、それを塀に吊して見張りをつけ、死体を見て泣き悲しんだ者を見つけるように命じた。一方、生き残った方は母親から激しく責められ、兄弟の死体を持ち帰るように命じられた。そこで彼は一計を案じた。数頭の驢馬を用意し、酒を満たした革袋をいくつも背に積むと、死体の見張り番たちの前にきて、酒を彼らに十分に振る舞うと、結局、見張り番たちは酔い潰れて眠ってしまった。彼は兄弟の死体を降ろし、一人の番人の右頬を剃ってから、死体を驢馬に積んで家に曳いていった。死体が盗まれたことを知った王は大いに怒り、とても信じがたい行動にでた。王は自分の娘を娼家に送り、だれでもかまず客にとり、これまでもっとも巧妙で一番非道なことを話させるように命じた。つまり、例の盗みの事件を語った者がいれば、その男を捕らえようとしたのである。盗みを働いた者はこの奸計に気づき、ある殺されたばかりの死体の片腕を切り落とし、これを上着の下に隠しもって娼家に出向いた。そして自らの手柄話を語ったので、王女は彼を捕らえようとすると、男は闇の中で例の片腕を差し出した。王女がこの腕を握っているあいだに彼は逃げてしまった。このことが王の耳に入ると、その男の俊敏さと大胆不敵さに感心して、当人が出頭すれば罪を許し、多大な恩賞を与えようとお触れを出した。その男が王のお触れを信頼して現れると、彼を誉めそやし、世界で並びない知恵者であるとして、王女を妻として彼に与えたという（松平千秋訳、『歴史』（上）、岩波文庫、1971 年、235-237 ページ）。

と呼ばれた。彼が書き加えているところによれば、前者は崇拝され、後者には反対に犠牲が捧げられた。それはあたかも、善い根源と認めたものを愛するが、悪しき根源には犠牲を捧げることしかしない未開人のごとくである[41]。

第 10 番　運命の輪（La Roue de Fortune）

この図版の最後の数は「運命の輪」である。ここでは人間が、猿、犬、兎の姿をとり、輪の上に結びつけられ、交代に昇っている。これは、運命への皮肉であり、運命が速く上昇させ、また同じ速さで降下させる者たちへの皮肉であると言いうるだろう。

図版Ⅷ

第 20 番　誤って「最後の審判」と名づけられたカード（Tableau mal nommé le Jugement dernier）

このカードはトランペットを鳴らしている天使を表している。そこにはまた、地上から一人の老人、一人の女性、一人の裸の子どもが現れている。これらのカードの意味と全体を見損なったカード製作者は、ここに「最後の審判」を見いだした。そして、より分かりやすくするために、そこに一種の墓のようなものを置いた。この墓を取り去れば、このカードは、第 21 番が示しているのと同様に、時の中に、時の始まりに生じた「創造」（Création）を示すのに役立つ。

第 21 番　誤って「世界」と名づけられた時（Le Tems, mal nommé le Monde）

このカードを、カード製作者はそれが万物の始原と見なしているがゆえに「世界」と呼んでいるが、「時」を表している。その全体に基づけば、誤って理解することはありえない。

---

[41] ヘロドトス『歴史』第２巻（121）。「この王の残した記念物としては、ヘパイトス神殿の西の楼門があるが、彼はこの楼門の前に高さ25キュペスもある二つの像を建てた。エジプト人は北側の像を『夏』、南側のものを『冬』と呼んでいる。『夏』と呼んでいる像には拝礼もしこれを鄭重に扱っているが、『冬』と呼ばれる像の扱い方はそれとは全く逆である」（前掲訳、235 ページ）。

その中心には「時」の女神がいて、飛ぶための翼を持ち、古代の人々が「ペプルム」（Peplum）と呼んでいた帯を身につけている。彼女は時のように走ろうとしており、そして、時とともに万物が生まれ出た卵のような、時の回転を表す円の中にいる。

このカードの四隅には四季の象徴があり、それらは一年の回転を形成しており、またそれらは智天使の頭部を構成している。それらの象徴は以下のとおりである。

鷲、獅子、牛、青年。

鷲は、鳥が再び現れる春を表す。

獅子は、夏、すなわち太陽の熱を表す。

牛は、人々が畑を耕し、種を蒔く秋を表す。

青年は、人々が社会に集う冬を表す。

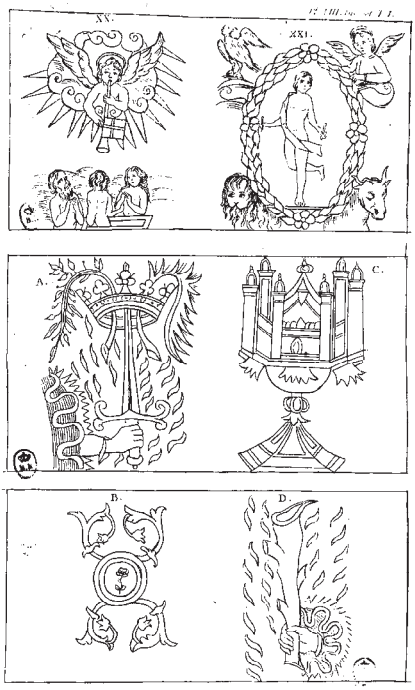

図７　ド・ジェブラン「タロット・カードについて」　図版Ⅷ

第２項
スート（Les Couleurs）

切り札の他に、このゲームは４つのスート（Couleur）から構成され、それぞれは象徴によって区別されている。それらは剣（Épée）、コップ（Coupf）、棒（Baton）、コイン（Denier）と呼ばれている。

これら４つのスートのエース（As）は、図版 VIII において見ることができる。

A は剣のエースを表し、棕櫚が囲む王冠の上に載っている。

C はコップのエースを表し、城のように見えるが、かつては貨幣の大きなカップとして描かれていた。

D は棒のエースを表し、それは本当の棍棒である。

B はコインのエースを表し、花綱飾りで囲まれている。

これらのスートの各々は 14 枚のカードから、すなわち、１から 10 までの数字のカードと、4 枚の絵柄のカードから構成されており、後者は、王（Roi）、女王（Reine）、騎士あるいは騎手（chevalier ou Cavalier）、その小姓あるいは従者（Ecuyer ou Valet）と呼ばれている。

これら４つのスートは、エジプト人が区別した４つの境遇に関係している。

剣は、軍事的な支配者と貴族を示す。

コップは、聖職者あるいは祭司を示す。

棒あるいはヘラクレスの棍棒は、農業を示す。

コインは、貨幣を徴とする商業を示す。

このカードは 7 という数字に基づく。

このゲームは 7 という聖なる数字に全面的に基づいている。各々のスートは 7×2（＝14）である。切り札は 7×3（＝21）の数から成る。カードの枚数は 77 である。「狂人」は 0 である。ところで、この数がエジプト人において果たしていた役割について、また、それがエジプト人において、あらゆる学知の原理が導かれる定式となったことについて知らない者はいない。

このゲームの中で 13 の数に与えられた不吉な観念もまた、同じ起源に帰着する。

それゆえ、このゲームがエジプト人によって案出されていたのは、それが７という数を基礎としているからであり、それが４つの境遇から成るエジプトの住民の区分と関係しているからである。そして、切り札の大部分は、エジプトに全面的に関係しており、例えば、祭司たちの二人の長、男性と女性、イシス、あるいは「犬の星」、テュポン、オシリス、神の家、世界、回帰線を示す犬たち、などである。そして、このゲームは完全に寓意的なものなので、

エジプト人による営為でしかありえない。

このゲームはチェスの前か後に、才智に溢れた者によって案出され、愉悦のために利用され、すべての世紀を通ってわれわれへと到達した。それはエジプトと、それを理解しうる識者たちの完全な破滅を生き延びてきた。それが含んでいる教訓の叡智についてはまったく思いも及ばなかったが、しかし人々は、案出されたゲームを楽しむことに事欠かなかった。

さらに、このゲームがわれわれの地域へと到着するためにとった経路を跡づけることは容易である。教会の最初の諸世紀に、エジプト人はローマに広がった。彼らは自らの祭儀とイシス崇拝をローマにもたらした。

このゲームは、それ自体として興味深いものだが、初めはイタリアに限定されていた。続いて、ドイツ人とイタリア人の交流によって、ドイツの国民に知られるようになった。また、プロヴァンスとイタリアの諸侯との交流と、とりわけ、教皇庁のアヴィニョンへの移設によってプロヴァンスとアヴィニョンで普及した。

このゲームがパリまで至らなかったのは、その図像の奇妙さとカードの多さに原因を求めるべきだろう。というのは、こうしたカードは、当然のことだが、フランスの活発なご婦人たちを楽しませることはできなかったからである。こうして、すぐのちに見るように、このゲームは彼らの好むように、過度に簡略化されることを強いられた。

しかしながら、エジプト自体もまた、自らの案出物の果実を享受することはなかった。きわめて嘆かわしい隷属状態に、きわめて深い無知に追い込まれ、あらゆる学芸を取り除かれ、エジプトの住民たちは、このゲームの一枚すら制作することができない状態だった。

われわれフランスのカードが、限りなく簡略されたがゆえに、多数の手によって支えられる作業と多くの学芸の協力が必要とされるならば、いかにしてこの不幸なエジプトの民は自らのものを保持することができただろうか。これが隷属状態にある民族に根を下ろしている不幸であり、彼らは自らの娯楽の対象さえも失っている。彼らは、きわめて貴重な利得を保持することができないのに、いかなる権利を、愉快な気晴らしでしかないものに主張できるのだろうか。

このゲームに保存されている東洋的な名称。

このゲームは、もし他の証拠が存在しないならば、それが東洋的なゲームであることを明言するような名称を保存している。

それらの名称はタロ（Taro）、マト（Mat）、パガド（Pagad）である。

1　タロット（Tarots）

このゲームの名称は純粋にエジプト的である。それは「道」、「道路」を意味する「タル」（Tar）と、「王」、「王の」を意味する「ロ」（Ro）、「ロス」（Ros）、「ロス」（Roc）から構成されている。文字通りには、それは「人生の王の道」である。

それは実際に、市民たちの人生全体に関係している。というのは、それは、彼らの中で分かれている様々な境遇から形成されており、またこのゲームは彼らの誕生から死にいたるまでを辿り、彼らが専心しなければならないあらゆる徳と、あらゆる自然的、かつ道徳的な導き手、例えば、王、女王、宗教の長たち、太陽、月などを彼らに示すからである。

このゲームは彼らに同時に、「コップの使い手」と「運命の輪」によって、この世界において人間の様々な境遇よりも変わり易いものはないことを、そして、唯一の避難所は、必要なときにけっして欠くことのない徳の中にあることを教える。

2　マト（Mat）

「マト」は狂人の世俗的な名称で、イタリア語に見いだされるが、東洋の「マト」、すなわち、打たれた、殴られた、割られた、という語に由来する。狂人は常に、常軌を逸した頭の持ち主として表される。

3　パガド（Pagad）

コップの使い手は、現在のゲームにおいては「パガド」と呼ばれる。この名称は、われわれ西洋の言語において類似したものはなく、純粋に東洋的なもので、巧みに選ばれたものである。「パグ」（Pag）は東洋では、長、師、主

人を意味し、「ガド」（Gad）は運命を意味する。実際、彼はヤコブの棒、あるいは三博士（マギ）の棒を持ち、運命を意のままにする者として表される。

［中略］

結論

われわれは自らを誇りたいと思うのだが、わが読者の方々は、カードというきわめて一般的な対象についての様々な見解を、喜んで受け取られたことであろう。そして、この対象については今日まで担わされてきた曖昧で、錯綜した観念しか語られていないことを見いだしたであろう。

以上の提言よりもさらに証明されるものはないであろうこと。

カードはシャルル６世以前には存在しなかったこと。

イタリア人がカードを採り上げた最初の民族だったこと。

タロット・カードの図像は突飛なものであること。

カードの起源を市民生活の様々な境遇の中に求めるのは馬鹿げたことであること。

このゲームは平和な生活のイメージであり、一方、チェスのゲームは戦争のイメージであること。

チェスのゲームはカード・ゲームよりも古いものであること。

こうして、いかなる種類のものであれ、真理の欠如があらゆる種類の誤謬の山を産みだし、それは多かれ少なかれ不確実なもので、その結果、別の真理と結びつき、それと対立し、それを拒絶することになった。

このゲームの予言への適用

エジプトのゲームについてのこの探求と考察を終えるにあたって、われわれは、すでに告知していた論考[42] を公衆の目の前に置くことにしたい。そこでは、いかにしてエジプト人がこのゲームを予言の術に適用したのか、また、

[42] M. le C. de M. ***（実際はド・メレ）の論考「タロットについて、およびタロット・ゲームによる予言についての探究」のこと。

いかなる仕方でこの同じ観点が、エジプトのゲームを模倣してつくられた、われわれの遊戯用のカードへと転用されるのかが明らかにされる。

そこではとりわけ、われわれがすでにこの巻［『原初世界』第８巻］において述べたことが見いだされるだろう。すなわち、夢の解明は、古代においては、賢者たちのヒエログリフ的で哲学的な学問と見なされ、彼らは、神性がその実行を許した、夢についての彼らの様々な推測の結果を学問にしようと熱心だった。そして、この学問全体が、時の推移の中で消え失せたが、しかし賢明な仕方で保持されもした。というのは、この学問は自ら、無益で取るに足らない考察となり、無知蒙昧な諸世紀のただ中にあっては、常軌を逸した者や迷信深い者のもっとも重大な関心事とは反対なものでありえたからである。

この賢明な考察者はわれわれに、スペインのカードがエジプトのカードの模倣であることの新しい証拠を提示している。というのは、彼はわれわれに、それが運命を占うピケ（Piquet）のゲームとともにあり、このカードの多くの名称がエジプト的観念にきわめて深く関係していることを教えているからである。

コインの第３番は領主と、すなわちオシリスと呼ばれる。
コップの第３番は女君主と、すなわちイシスと呼ばれる。
コップの第２番は雌牛と、すなわちアピスと呼ばれる。
コインの第９番はヘルメス［＝トート］と呼ばれる。
棒のエースは蛇と、すなわちエジプト人における農業の象徴と呼ばれる。
コインのエースは片目の者、すなわちアポロンと呼ばれる。

この「片目の者」（Borgne）という名称はアポロンに、あるいは、一つの目だけをもつ太陽に与えられており、われわれに多くの証拠に加えて一つの証拠を付与する「自然」に賦与された形容辞である。そして、著名な寓意的泉においた片目を失った、エッダの有名な人物は、太陽、「片目の者」、あるい

は、とりわけ「単一の目」に他ならない[43]。

この論考はさらに多くの事柄に満ちており、エジプトの賢者たちが「運命の書」に相談する方法についての明瞭な観念をもたらすのに適している。そしてわれわれは、今日までこのような探究が欠けていた公衆によってそれが容易に受け入れられることを疑わない。というのは、誰も今日まで、かつて時の深い闇の中で消え去ったと思われた対象について専心するという勇気をもつことはなかったからである。

[43] 北欧神話の『エッダ』において、オーディンの伯父であるミーミル（考える人）は強靭で、知恵の泉「ミーミルの泉」の番人である。オーディンはその泉の水を所望するが、その代償として片方の目を失った。以下の記述を参照。「霜の巨人のいる方にむいている根の下にはミーミルの泉があって、知恵と知識が隠されている。その泉の持主はミーミルという。彼は知恵の固まりだが、それは、彼が泉の水をギャラルホルンという角杯で飲んだからなのだ。そこへ万物の父（オーディン）がやってきて、泉から一口飲ましてくれ、と言った。そして、自分の眼を抵当にしてやっと飲ましてもらった。『巫女の予言』にはこう言われている。オーディンよ／われは知る／汝がいずこに／その眼を隠せしか／ミーミルの名高き泉の中なり／ミーミルは朝ごとに／戦死者の父の抵当より／密酒を飲む／おわかりか」（「ギャルヴェィたぶらかし」、谷口幸男訳、『エッダ――古代北欧歌謡集』、新潮社、1973 年、236-237 ページ）。